

## 講演会企画プレゼン

保坂和志の「世界」に対する視点 ～「言葉」と「写真」から探る～

2000・11・13 担当：大城 尚

---

### 0・はじめに

このプレゼンでは、主眼を保坂和志に置き、「言葉」「写真」と照らし合わせることで、彼がどのような視点から世界を描き出していくのかということをも明らかにしたい。

---

### 1・言葉はどこまで有効か？

ここでは言語理論にみられる相対論の問題を考えながら、保坂の世界観だけでなく、保坂にとって文学とは？ということについてまで考えてみたい。

「言葉は世界から生まれたのであって 世界が言葉から生まれたのではない」\*1

言語学における相対論の問題とは何か

アメリカの言語学史上を見ていくときに現れる、言語と世界の間をどう捉えるかという2つの対立する言語理論

チョムスキーの言語理論（客観主義的言語観）

サピア・ウォーフの仮説（主観主義的言語観）

ノーム・チョムスキー（1928～ ） 《客観主義的言語観》

アメリカのペンシルバニア州に生まれる。MIT(Massachusetts Institute of Technology) Institute Professor.PF.D 生成文法理論を提唱しその影響は関係諸分野に及んでいる。近年はミニマリスト・プログラム（極小主

義に基づく研究計画)に沿い、精力的に改訂を続けている。言語学の著書・論文のみならず、政治論文も膨大な数にのぼる。

言語能力 (competence) は話し手の頭脳や精神に内在すると思われる、文を作り出したり理解したりする潜在能力のことである。そしてその言語運用 (performance) の基盤・言語の変化を包括的に、規則の形で表したものが生成文法である。

生成文法は絶えず修正を繰り返し(チョムスキーがつねに学問も動的であることを望んでいる) ているので、標準理論(1965)・拡大標準理論(1970頃)・改訂拡大標準理論(1975)・GB理論(1981)へと変化していき現在に至る。

colorless green ideas sleep furiously 意味が通じる・どの言語にも対応するような能力が人にはあるのではないだろうか 普遍文法 (universal grammar)

これは人間は生まれながらにして遺伝的に言語の基本構造を身につけているのではないかという言語の生得説である。

エドワード・サピア (1884～1939) 《主観主義的言語観》

1884年ドイツに生まれる。1889年アメリカに渡り、アメリカ・インディアン語を研究。ペンシルヴァニア大学講師、シカゴ大学教授を経て、イェール大学教授。アメリカの比較言語学、文化人類学に貢献した。

ベンジャミン・リー・ウォーフ (1897～1941) 《主観主義的言語観》

サピアの弟子。火災生命保険会社で働いていたが、旧約聖書のヘブライ語の解釈に興味を持ち、大学院へと進んだ。

(この二人は一緒に何かしたというわけではなく、後の言語学者ジョン・キャロルが二人の似ている考え方をまとめて「サピア＝ウォーフの仮説」とした)

世界の認識の方法

どの方向から見ようが山は山で同じ一つの山であることに変わりないし、人に見られなくても山も海も存在していて、それはなんというか、じゅうぶんに自足している。だから人間が存在していなかったら山も海もその美しさが知られなかったというようなことは、本当に山や海にとってはどうでもいいことで、山も海もそれ自身としてのダイナミズムをもって存在している、  
というか絶えずすこしずつ変化している。\*2

客観主義的 (objectivism) 言語理論は、世界はただそこにあり、人間の認識に言葉を当てることで人間は話すことができるとする。言語を通さないと理解できる事柄もある。

個個人としてのわれわれは自分たちの言語を「作った」であろうか。たとえば、あなたや私は英語を「作った」であろうか。そんなことは、ナンセンスであるか、誤りであるかのどちらかであろう。われわれにとっては自分が身につけた言語について選択の余地などありはしなかったのである。われわれの内的仕組と環境によって言語はわれわれの精神のうちに発達してしまったのである。では言語はわれわれの遠い祖先たちによって「作られた」の  
であろうか。そのような見解にはなんらの意味も認め難い。実際、人間の視覚系や、それが捉える様々な形を「われわれが作った」と考える理由がないのとまったく同様に、言語をわれわれが「作った」と考える理由はない。\*3

「言語っていうのはこういう力の流れで、それが渦になっている場所が人間なんだと思うな」と言った。それは”種としての人間”のことかそれとも”個人としての人間”のことかと僕が訊くと、松井さんは「一人一人」と言って、鍋の中のはるさめを箸のさきでくるくると巻いて見せて、こういう風に言語の流れが渦になってい  
る場所があってそれが一人一人の人間で、生物学的な環境への適応力とか遺伝とか本能とか、他の動物ではダイレ

クトに機能しているものがすべて、このはるさめのような言語の流れの力にいったん還元されているのが人間なんだと言った。\*4

主観主義的 (subjectivism) 言語理論においては、ものの見え方というのは文化によって変わり、人間は言葉を通して世界を認識しているのだとする。言語によって世界が作り出されるとする立場。つきつめてしまうと言語がなければ世界がないということになる。

「ことばなしで考えることができますか」と尋ねられたならば、大抵の人はおそらく、「はい、できません。だが、私にはそうするのが容易ではありません。それにしてもできるということはわかります」と答えるであろう。言語は衣服にすぎないというのだ。しかし、言語が衣服でなく、むしろあらかじめ用意された道、または溝であるとすれば、どうだろう。言語は本来は概念の平面よりも低い用途にあてられた道具であって、思惟はその内容の洗練された解釈として起ち上がったと考えるのが、実際、一番もっともらしく思われる。いいかえれば、生産品は機械によって生ずるのであって、数学上の推論が、適切な数学の記号表示の授けをまたなければ不可能であるように、思惟はその発生においても、日常の思索にあっても、ことばなしでは想像できないであろう。\*5

これら二つの言語理論の「世界」の捉え方の違いは、つまり世界があって、人間があり、言葉はそれらを認識するものとして能力を内在化させている (チョムスキー) と、言葉が世界を作りだしていく (サピア=ウォーフの仮説) という世界観の違いである。

保坂和志は前者だと考える。(講演会の告知の文章参照) ところで、この違いは「文学」というもの(「言葉によってもうひとつの世界を作りだしていくもの」という理解があるもの)に対する姿勢と関わってくるのではないだろうか？

言葉の力ってそんなに強い？

「人間の感覚はほかの動物と同じように、自分が個体として環境に適応していく必要性として発達してきたものであって、世界の実体を知るために発達してきたわけではない。同様に、理性も大部分は環境に適応する能力の一環として発達してきた。だから素朴文学趣味の好む 等身大の私 などいくら駆使してみても、環境適応性の次元でしか世界を把握することはできない。本当に世界の実体を知りたいと思う なら、私 の次元をいったん切り捨てて、世界の法則や掟を知ることには喜びを見いださない」ということになるだろう。\*6

保坂は、はたしてどれほど言葉を信じているのだろうか。言葉の力を信じ切ったとたん、そこから先は「環境適応性の次元でしか世界を把握することはできない。」保坂は言葉の力の弱さを知っている人間だからこそ、可能性のある小説家なのだと言いたい。その正反対の立場は文学至上主義(?)であり、言葉が本来(!)持っていた力を取り戻せという立場である。

だが、もう一度いうけれども、「いまの」文学は私にはちっとも必要でもなければ、それに対するなんらの飢えを感じることもない。そのようなものを感じる人間がいるのかどうかもわからない。何人が去年の芥川賞の作品を読んで涙を流し、何人の人生がそれによってゆさぶられるのだ?\*7

私はエンターテインメントが好きだが、それだけではつまらない。本当に重大なテーマをはらんだ小説と出会いたいし、それに感動したい。重いテーマをはらみ、それを圧倒的な文章のパワーでもって押切ってゆくそういう文学が読みたい。また、下らないがすばらしい技術にささえられた「見事な工芸品」としての小説も読みたい。つまらぬ文学意識にその技術をさまたげられたくはない。私は読者として、あとうかぎり自由に、豊かに活字による表現というこの海を泳ぎ回りたい。あとからあとから出てくる小説群を、工場から流れ作業で出てくる缶詰のようには思いたくな

い。それは人類の文字における営為の結晶、ゆたかな収穫、というように思いたい。\*8

言葉は本来世界を作り出す強大な力をもったものなのだと考え続けるかぎり、逆に、その先に「世界」を実感することができないのではないだろうか。「別種のディスクールを準備する」\*9 ためには「言葉が世界から生まれた」\*10 ということを実感しなければならない。

---

## 2・写真が切り取る世界

あたり前すぎるくらいあたり前の話だが、犬も猫もこの世の中に、ぼくが生まれるよりずっと前から存在している。ぼくが生まれるよりずっと昔に生きていた犬もいれば猫もいる。でもそのことをいつもリアルに感じているわけではない。(中略) 「かつて確かに、年齢も理解力も自分より上の犬が猫がいた」ということを、ふだんは実感することができないでいる。\*11

今人間は自分の目の前にある世界しか認識することができないが、だからといって世界がなくなるわけではない。世界は自分と関係なく存在している。そのことを保坂の小説は考えさせる。言語によって作り出すのではなく、忠実に世界を実感していこうとする保坂の試みを、ここでは「写真」を通して見ていきたい。

「写真の本質は流動する現像の中から1つの現実を断ち切ること」  
(ラルフ・エバンス)

あるひとつの時間を保持するため、そしてそれを理解し分析し、過去の断面を未来に持っていくために写真はある。

保坂にとっての小説とはそういうものなのではないだろうか。

写真は世界に存在するが、不可視なものを切り取ることができる。そしてそこから私たちは現実を違った角度から見る視点をもつことができる。

「自分が生まれるよりずっと前に生きていた犬や猫がいた」

写真の猫の話とシネマトグラフの犬の話で、ぼくが伝えたいのはそれだけだ。自分が生まれるよりずっと前に生きていた犬や猫がいた。 - しかし、このことはぼくにとって、たとえば「愛しています」の一言のように複雑だ。あるいは、「そうだったのかあ……」というひとことを洩らすときのように複雑だ。それ以上何かを 考える必要なんかなくて、そのことをリアルに感じたそのことだけでじゅうぶんに 意味がある。あるいは、それだけでじゅうぶんに意味があることなのだから、それ 以上何か意味をつけ加える必要はない。しかし、それがどういう意味なのかという ことは考える必要がある。ぼくの中のどんなリアリティに訴えかけたということだ。」\*12

繰り返しになるが世界を「作りだした」のではなく、世界から「切り取った」ことで生まれてきたリアリティなのだと言えるであろう。

### 決定的瞬間

アンリ・カルティエ・ブレッソン「The Decisive Moment」(Image a la Savette)

写真集・1952年

「決定的瞬間とは意識とビジョンが1つになり内容と形式が合致した瞬間である。それを選べるのは直感でしかない。」

一見「決定的瞬間」とはどこがそうなのか分からない写真だが、そのなかには現実の世界を切り取ったときに浮かび上がる、確かに存在していた瞬間の力学を見つけることができる。

作り手が意図を持って変形ないし色づけした映像は主体の側のもので、いまの僕にはそれはつまらない。風景そのものの中に論理や運動や力学を見つけようとする映像じゃないとつまらない。ということだろうか。\*13

絵画的に創作されたものではなく、人間や風景に対してごく自然なまなざしを向けた作品が「決定的瞬間」である。保坂の小説をこの「決定的瞬間」の写真と照らし合わせるなら、美しく調和のとれた写真（小説）であることに違いはないが、その調和を見つけることができる人・すなわちこの写真が「決定的瞬間」だと（ある程度写真好きの）分かる人や、評論的が読むことができる（ある程度本好きの）読者であってもそうでなくてもそこに写し出されたもの（物語）を楽しむことができる、そういうものなんじゃないだろうか。（どちらが良いということでは決していない）

---

### 3・まとめ

保坂和志は世界に真摯に対峙している小説家だと感じる。「言葉」に必要以上によりかかることなく、しかし人間で在る以上、言葉を取捨するという選択肢はこの世界にはないのだという自覚（覚悟）を感じる。「言葉が世界を作る」などと奢ることなく、ありのまま捉えようとする保坂の小説は、今このプレゼンの最中にも 私の知らない場所（栃木県かもしれないしブルガリアかもしれない）の路地裏に猫がいて、死に絶えていったかもしれないと思わせるような、世界に対する想像力をかきたたせるものがある。

---

\*1 保坂和志HP 講演会告知より

\*2 保坂和志「季節の記憶」P114～115 講談社 [1996]

\*3 チョムスキー「ことばと認識」P16 井上和子 神尾昭雄 西山佑司 訳 大修館書店 [1984]

\*4 保坂和志「季節の記憶」P229～P230 講談社 [1996]

\*5 エドワード・サピーア「言語」P12～13 泉久之助訳 紀伊国屋書店 [1957]

\*6 保坂和志「アウトブリード」P30 朝日出版社 [1998]

\*7 中島梓「夢見る頃を過ぎても」P241 ちくま文庫 [1999]

\*8 同書 P246～247

\*9 保坂和志「アウトブリード」P16 朝日出版社 [1998]

- \*10 保坂和志 H P 講演会告知
- \*11 保坂和志「<私>という演算」 P 12 ~ P 13 新書館 [ 1999 ]
- \*12 同書 P 14 ~ P 15
- \*13 保坂和志「アウトブリード」 P 114 朝日出版社 [ 1998 ]